

2023年6月25日（日）主日朝礼拝説教

『良くなりたいか』 井上隆晶牧師  
使徒言行録14章8～10節、ヨハネ福音書5章1～16節

### ①【良くなりたいか】

エルサレムに「羊の門」という門があり、この門の傍らに「ベトザタ（ベテスダ：憐れみの家という意味）」という池がありました。その池の周りには五つの回廊があって、そこに多くの病人や、身体障がい者たちが集まっていました。なぜでしょう。「彼らは水が動くのを待っていた。それは主の使いがときどき池に降りてきて、水が動くことがあり、水が動いたとき、真っ先に水に入る者は、どんな病気にかかっているか、癒されたからである。」（3～4節）という文章が他の写本には入っています。つまり奇跡の池だったのです。フランスにルルドという場所があり、そこにある洞窟の泉に世界中から多くの病人がやって行きます。その水を飲むと不治の病が癒されたという奇跡が次々と起こったからです。それと同じです。でもルルドと違って、ベトザタの池では癒されるのは真っ先に水に入る者だけでしたから、そこにはものすごい競争があったと思います。他人を押しつけて先に池に下りていこうとする者、池に近い場所を取る者たちのいがみ合い、喧嘩、言い争いが絶えなかったと思います。病人になっても競争し、争うなんて人間は何と醜いのだろうと思います。でもそれが人間の本性なのです。

「さてそこに38年も病気で苦しんでいる人」（5節）がいました。38年とは当時でいえば、人生のほとんどだと思います。イエス様は「その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、『良くなりたいか』（6節）といわれました。「良くなりたいか」というのは憐れみの言葉に聞こえますが、ただそれだけではないと思います。イエス様はご自分の所にやってくるいろんな病人を癒しましたが「良くなりたいか」と聞かれたことはありません。この人にだけです。するとこの病人は答えます。「水が動く時、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」（7節）つまり彼は自分の病気が治らないのを周りの人のせいにはしているのです。

### ②【病気が癒された二人の人の生き方の違い】

同じ病気が癒された人でも、使徒言行録に出てくる「足の不自由な男」と「38年間寝たきりの男」とはえらい違うのです。ペトロとヨハネが癒した男は歩けるようになると、躍り上がって立ち、神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行きました。（使徒3：8）パウロが癒した男は歩けるようになると、躍り上がって歩き出しました。（使徒14：10）この二人に共通なのは「いやされるのにふさわしい信仰」（14：9）があったということです。それは熱心という意味ではありません。肉体は病んでいたけれども、心は神に向かって生きていたという意味です。言い

換えれば病気でも、癒されても神を賛美して生きていたという事です。

ところがイエス様に病を癒してもらった男は、歩けるようになったのに、あまり喜んでいないのです。安息日に癒されたので、それをユダヤ人から非難された時、「私を癒して下さった方が歩け」と言ったのですと、責任転嫁しています。そして神殿の境内でイエス様に再開した時「**もう罪を犯してはいけません。さもないと、もっと悪いことが起るかもしれない**」(ヨハネ5:14)と警告されたにもかかわらず、自分を癒したのはイエス様だとユダヤ人たちに知らせたので、イエス様は迫害されたと書かれています。彼の問題点とは、いつも人に向けて生きている、人を頼って生きているということです。ベトザタの池での彼の返答には「神」という言葉が出て来ません。いつも「人」です。「助けてくれる人がいない」「この人が悪い」です。ではなぜ、人に向かって生きてはいけないのでしょうか？

●昔「アルコール依存」について講演をしてくださった新阿武山病院のSさんがこんなことを言っていました。

「アル中の本人は置いておいて、まず家族が幸せになりましょう。本人がアルコールをやめても、また飲んだらどうしようと家族は心配するんです。幸せは当事者に与えてもらおうという考え方を捨てることです。」

人を通して幸せをもらえんと思っはなりません。人に期待してはいけません。人に期待して、期待したものが相手からもらえなかつたら腹を立て、相手を恨むようになるでしょう。期待された人も潰れてしまいます。幸せは神との祈りの中で、神によって与えられる平安と満足の心なのです。希望は神に向けなければなりません。

### ③【床を担いで歩きなさい】

イエス様は彼に「**起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。**」(5:8)と命じられました。するとその人はすぐに良くなって床を担いで歩き出しました。こんな話を聞いたことがあります。

●ノーマン・ビンセント・ピールというカナダの政治家がいます。彼は小児麻痺のため、片方の足が成長せず、小学校に入るところから片足を引いて歩くようになりました。かけっこや木登りやスポーツが出来ないので、劣等感と屈辱感を味わっていました。見るに見かねた父親が「お父さんがいつかお前の足を治してやるよ」と約束します。ある日、父親は「さあ、足を治しにゆこう」と言って彼と教会に行きました。二人は祭壇の前で祈りました。父親は泣いていました。長い時間が経ち、遂に父親は立ち上がりました。父親は彼の肩を叩きながら言いました。「息子よ、お前の足は治ったぞ。さあ行こう」と、しかし彼は松葉杖なしには歩けませんでした。教会の入口まで来た時、彼は自分の中に大きな変化を覚えしました。父親を見上げて「お父さん、僕の足治ったよ」と叫びました。彼は相変わらず松葉杖をつきつつ家に帰りました。でも心の松葉杖は取れていました。もはや

コンプレックスはなくなり、足が不自由であるという現実を素直に受け止める自分をそこに発見したのです。」

体は病んでいても、心が病んでいないことこそ本当の健康です。

英語の「リカバリー」には「回復」という意味があります。アメリカの精神医学会では、リカバリーは単に病気や障害が「治る」ことよりもっと広い意味で使われています。「病気が治る」ことだけをゴールとするなら、思うように回復しないと、いらだち、あたかも自分の人生は失敗であるかのように感じてしまいます。自分を病気の枠の中に閉じ込め、自分らしく生きれなくなるのです。病気はその人の一部にしか過ぎません。病気があっても人間らしく輝いて生きることが大事なのです。本当のリカバリーとは「自分らしく生きることを取り戻すこと」です。ですから、治るか治らないかというよりも、治療に取り組む前向きな姿勢を回復と呼ぶわけです。

その意味ではこの 38 年間寝たきりの病人は「病気が彼の人生のすべて」でした。自分を床に縛りつけ、治れば幸せ、治らなければ不幸、治れば生きる価値があり、治らなければ生きる価値がないという目で自分を見ていました。それが悪いのです。治らなくても感謝することは山ほどあるはずです。パウロも難病を癒されるように祈りましたが、神の答えは「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。」(Ⅱコリント 12:9) というもので癒されませんでした。でもパウロは弱さを大いに喜んだといえます。

イエス様が病を癒される意味は、その人が神に向かって生きるように変わって欲しいからです。病気が治って元気になり、ますます悪い事をし、神から離れ、神と人に対する感謝を忘れるならば病気が癒される意味がありません。まだ病気の中にいた方が良かったのです。Kさんは病気がきっかけで神に帰りました。主が彼を生かされたのは、神に向かって生きるようにするためなのです。

治るか治らないかということよりも、前向きに生き、輝いて生きている姿勢を回復と呼ぶならば、罪が犯さなくなるかどうかということよりも、キリストに向かって喜んで輝いて生きているなら、その人はもう回復していると言えるのです。つまり生き返っているのです。私たちも床を担いで歩きましょう。私の床とは「罪と死と病」です。それに支配されず、それがあっても大丈夫といえるのが「支配する」ということです。罪より大きな愛があるからです。死を飲み込む命があるからです。キリストが私たちと共に歩き、背負って生きて下さるからです。だから大丈夫と言えるのです。